

# 体育の学習指導過程と学習過程に関する研究

体育教室 永田靖章

## I 緒 論

体育の授業は、それぞれに特色があり、それぞれが異って展開されているように見える。このように、それぞれの授業がなぜ異なるのか、また、どのような工夫によって、そのような特色を生みだしているのかは、授業研究を推める上での重要な問題であるといえよう。しかし、どの授業の場合でも、一定の共通した条件の上に成立しているのです、おおよそ、同じような流れ（過程）をもつものであるといえよう。

授業研究では、この一定の条件や共通の流れに注目することが重要であると考えられている<sup>(注1)</sup>。それ故に、授業研究は、まず、どの授業にも必要な条件や共通の流れは何であるかについて理解し、その上で、工夫をすることによってよりよい授業を目指すべきであろう。

授業（学習指導）は、学習者を目指す方向に導いたり、学習者の主体的条件を変容させようとするものであるから、それに応じた方法（技術）が必要である。この指導の技術が具体的な形をとるのは、授業の流れ（過程）であるといわれている<sup>(注2)</sup>。しかし、この技術が成り立つためには、一定の条件が必要である。つまり、指導者と学習者だけでなく、学習の内容や施設用具などの条件が必要である。授業の技術は、これらの諸条件が一定の目標に向って結合（関連）して機能するときに生じるもので、この諸条件の結合が授業の構造であるといわれている<sup>(注3)</sup><sup>(注4)</sup>。

授業の技術は、授業の構造に基づいて学習指導計画を立て、それによって学習指導と学習の活動を展開することであるといえよう。それ故に、技術は、目的に向っての過程としての選ばれた組織的手段であると定義されているように、目的に到達するための手段や方法が技術であり過程であるといえる<sup>(注5)</sup>。

そこで、本研究では、この授業の流れに着目して、一般的な体育の授業における学習指導と学習の過程についてを、分析・検討してそのあり方を明らかにしてみようとするものである。

## II 問題の設定とねらい

体育の学習指導や学習は、それぞれの学習指導や学習の内容に応じた一連の働きであり活動であるので、現在の体育の概念規定や教材の選択を考えれば、運動は、発育発達への刺激であると同時に学習の内容であるといえよう<sup>(注6)</sup>。そのためには、この二つの観点が体育

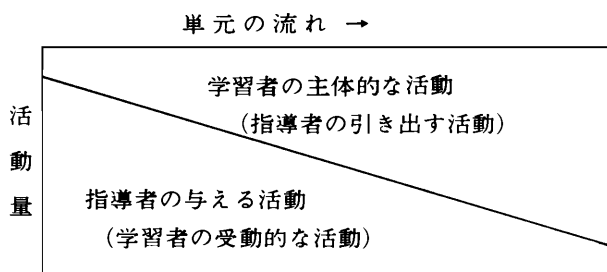
の授業において共に生かされるように、学習指導と学習の過程が考えられなければならないと考える。

そこで、本研究では、教育という営みの中で行われる体育の授業について、教育としてのねらいを反映させた学習者の主体性を育成するという立場に立った学習指導や学習の方法はどうあるべきなのかを見出すことが、究極的なねらいとするところである。しかし、今回は、学習指導や学習の過程の望ましいあり方としての基本的な流れの型を見出すことをねらいとして、分析・検討をしていこうとするものである。

このことは、学習指導や学習の過程としての体育の授業が展開されていく流れを、一単位時間を完結した授業としてみるのではなく、一つのまとまりとしての単元を単位としてとらえた中での一単位時間を問題としようとするものである。すなわち、一つの単元の中での指導者や学習者の活動の流れを、授業の中で必要と考えられる活動因子に分類し、それを量的に時間や頻度でとらえ、それぞれの活動因子の量的な増減や有無について分析・検討をし、単元のねらいを反映した学習者の立場に立った学習指導や学習の過程のあり方を導き出そうとするものである。なお、質的な視点については、今後の研究として別の機会に扱うことにする。

これらのことについて、次のような仮説を設定して、本研究のねらいを明らかにする具体的な視点とすることにする。

〔大仮説〕 どの単元でも、その単元の展開当初は、学習者の学習の見通しが充分では



ないので、図1のように、指導者の与える活動や学習者の受動的な活動が多く、単元の進行にともなって学習の目標が明確になってくるために、学習者の主体的活動や指導者の引き出す活動が多くなる。

図1. 単元における指導者と学習者の活動過程

(小仮説1) 指導者と学習者の活動因子には、単元が進行するに伴って活動量の増加する因子がある。

(小仮説2) 指導者と学習者の活動因子には、単元が進行するに伴って活動量の減少する因子がある。

(小仮説3) 指導者と学習者の活動因子には、単元の展開当初から終末に至るまで、活動量の増減にそれほどの変化のみられない因子がある。

以上のような仮説のもとで、本研究では、学習指導や学習の形態の問題は別として、<sup>(注7)</sup>一般的な体育の授業を展開していく過程を、指導者と学習者の活動因子の量的な時間量や頻度の変容という点に視点をあてて、分析・検討をしていこうとするものである。

### Ⅲ 研究の方法

#### 1. 研究の対象

愛知県K市立F中学校第2学年男子の1体育学級（68名）におけるバレーボール単元の授業（9時間単元）

なお、この体育学級のグループ編成は、グループ間等質・グループ内異質の9グループである。

#### 2. 調査の期日（授業観察期日）

調査（授業観察）の期日は、表1のとおりである。

表1. 調査の期日

時限	調査期日	曜日	時限	調査期日	曜日	時限	調査期日	曜日
1	昭和51年5月17日	月	4	昭和51年5月28日	金	7	昭和51年6月4日	金
2	昭和51年5月21日	金	5	昭和51年5月31日	月	8	昭和51年6月7日	月
3	昭和51年5月26日	水	6	昭和51年6月2日	水	9	昭和51年6月9日	水

#### 3. 研究の方法

授業分析表として、活動因子別行動観察記録用紙を作成し、バレーボール単元的全授業を観察して、その流れを活動因子別に記録した。（観察法によるチェックリストへの記入）

#### 4. 研究の手続

(1) バレーボール単元を対象としたのは、集団スポーツであり、小集団のグループをつくりやすく、学習指導や学習の過程を手がけるにあたって比較的容易であると考えたためである。また、授業の形態は、本研究では特別に考慮はしないが、現段階で比較的多く行われている一斉班別指導<sup>(注8)</sup>の形態をとり挙げた。

(2) 各活動因子の流れを記録するにあたっては、単元の展開当初から最終時限までの指導者と学習者の活動を、それぞれの活動因子別にその時間量でとらえることを中心とし（継続的活動）、その活動因子が1分間未満の場合には頻度でとらえることとした（単発的活動）。

また、指導者の活動は、学級全体・グループ・個人のいずれに対しての働きかけの活動であるのか、学習者の活動は、学級全体・グループ・個人のいずれを単位とした活動であるのか、の別を区別してとらえることとした。

(3) 指導者と学習者の各活動因子の具体的な因子は、表2のとおりである。

表2. 指導者と学習者の各活動因子

項目	活動因子	各活動因子の具体的な活動
指導者の活動因子	Instruction 活動	教授・説明・示範などの活動
	Suggestion 活動	示唆・ほのめかし・発問などの活動
	参加活動	学習活動への参加活動
	補助活動	学習活動（技能練習）への補助活動
	記録・測定活動	記録・測定・評価などの活動
	観察活動	学習や学習活動などの観察活動
	Direction 活動	指示・誘導などの活動
	学習者の管理活動	学習者への抑制管理活動
	施設用具の管理活動	施設用具などの点検整理活動
学習者の活動因子	身体活動	個人技能・集団技能・ゲーム・発表などの活動
	体操活動	準備・整理・補強などの体操活動
	聞く・見る活動	話を聞く・練習を見るなどの活動
	話し合い活動	話し合い・討論などの活動
	協力的活動	教え合い・助け合い・補助などの活動
	審判・運営活動	審判・運営などの活動
	研究的活動	計画立案・資料研究などの活動
	記録・測定活動	記録・測定・反省などの活動
	用具の管理活動	用具の準備・あと始末などの活動
	学習をつなぐ活動	待機・移動・集合・整列などの活動
望ましくない活動	ふざける・なにもしていないなどの活動	

#### IV 研究の結果とその考察

##### 1. 指導者の学習指導過程にみられる活動因子の量的変容<sup>(注9)</sup>

学習指導過程は、指導者が学習者の学習を指導する道すじであるから、学習過程に合わせて考えられるものである。

一般的に学習指導過程は、指導者が学習の準備や導入のために指導しなければならない段階（はじめの段階）と、活発な学習が進められる段階（なかの段階）、最後に学習の整理をさせながら教師の立場からも指導の成果をまとめる段階（まとめの段階）の3段階に分けることができる。しかし、体育は他の教科と比較して、学習の基本的原理が異なることはないが、身体活動を媒介とした教育という特徴があるために、その学習指導過程は異なるはずである。

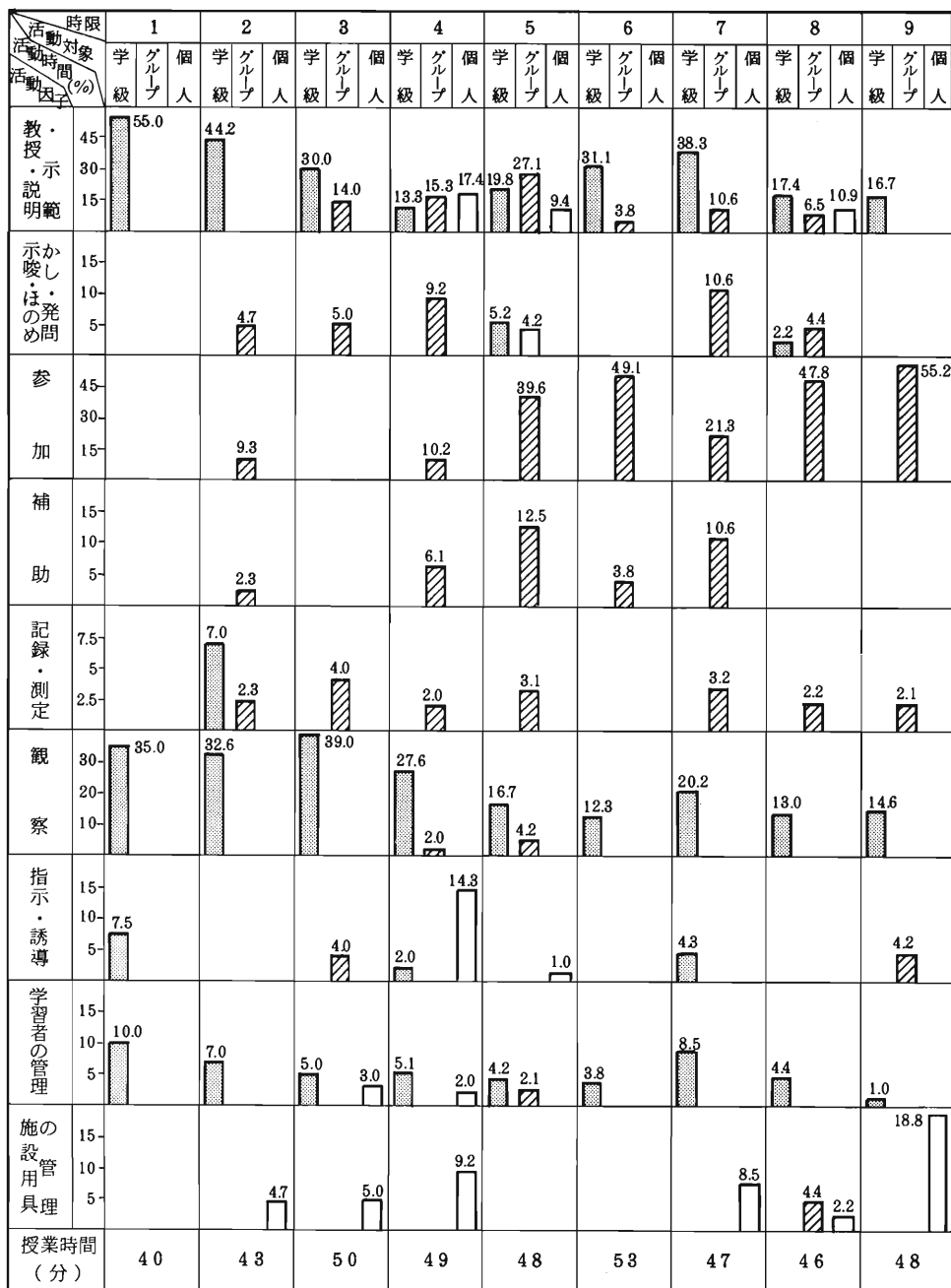
そこで、指導者の学習指導過程における活動を各因子ごとに、継続的活動と単発的活動に分けてその量的な変容の過程を分析・検討することによって、仮設のような一定の法則

性を見出そうとするものである。

(1) 継続的活動の量的変容

指導者の学習指導過程にみられる継続的活動の量的変容を示したものが、図2である。

図2. 指導者の学習指導過程にみられる継続的活動の量的変容



指導者の継続的活動の各因子の中で、体育学級全体を対象としてなされる活動は、教授・説明・示範の活動（与える活動）、観察の活動、学習者の管理活動などにおいて、単元の展開当初から終末に至るまでの各時間でみられる。各グループに対してなされる活動は、教授・説明・示範の活動（与える活動）、示唆・ほのめかし・発問の活動（引き出す活動）、学習者の学習活動への参加活動、記録・測定の活動などにおいて「なかの段階」から「まとめの段階」にかけて、また、学習活動の補助の活動において「なかの段階」でみられる。学習者個人に対してなされる活動は、それほど特徴的な活動はみられないが、施設用具の管理活動において「なかの段階」と「まとめの段階」で、また、教授・説明・示範の活動（与える活動）、指示・誘導の活動（引き出す活動）、学習者の管理活動において「なかの段階」でみられる。

つまり、体育学級全体に対する働きかけは、単元の学習指導過程の全てにわたって行われ、グループに対する働きかけは、「なかの段階」から「まとめの段階」にかけて行われ、さらに、学習者個人に対する働きかけは、必要に応じて「なかの段階」において行われているといえる。また、指導者の学習指導過程において中心的な活動を占めている因子は、教授・説明・示範の活動（与える活動）、学習活動への参加の活動、観察の活動である。さらに、補助的・周辺的な指導者の学習指導過程における因子は、指示・誘導の活動である。

単元における学習指導過程で指導者の活動が減少傾向を示しているのは、体育学級全体に対する働きかけをしている活動で、教授・説明・示範の活動（与える活動）、観察の活動、学習者の管理活動でみられる。増加傾向を示しているのは、各グループに対する働きかけでは、学習者の学習活動への参加活動にみられ、指導者個人の活動としてでは、施設用具の管理活動にみられる。指導者の活動量にそれほどの変化がみられず増減傾向の少ないのは、各グループに対しての記録・測定の活動で、おおよそ一定の活動を毎時間行っている。

また、「なかの段階」にだけみられる活動では、各グループに対しては、教授・説明・示範の活動（与える活動）、示唆・ほのめかし・発問の活動（引き出す活動）、学習者の学習活動への補助の活動である。体育学級全体に対してでは、教授・説明・示範の活動（与える活動）と示唆・ほのめかし・発問の活動（引き出す活動）にみられ、学習者個人に対してでは、教授・説明・示範の活動（与える活動）と指示・誘導の活動である。

つまり、仮設の傾向を活動因子ごとに見出し検証することができたほかに、「なかの段階」だけにみられる指導者の活動を見出すことができた。

## (2) 単発的活動の量的変容

指導者の学習指導過程にみられる単発的活動の量的変容を示したものが図3である。

図3. 指導者の学習指導過程にみられる単発的活動の量的変容

時限 活動対象 活動時間 活動因子(%)	1			2			3			4			5			6			7			8			9		
	学級	グループ	個人	学級	グループ	個人	学級	グループ	個人	学級	グループ	個人	学級	グループ	個人	学級	グループ	個人	学級	グループ	個人	学級	グループ	個人			
教・授・示・説明範		4.8					6.7			11.1			15.4			8.3											
示唆・ほのめかし・発問				7.7																				17.6			
補助		4.8		7.7					3.7																		
指示・誘導	33.3	14.3	9.5	61.5	7.7	15.4	60.0	20.0	6.7	40.7	14.8	22.2	69.2	15.4	58.8	25.0	8.3	75.0	16.7	68.8	6.3	25.0	64.7	5.9	5.9		
学の習管理者理									7.4								8.3										
施設の設備用具理		33.3						6.7																5.9			
頻度(回数)	21			13			15			27			13			12			12			16			17		

指導者の単発的活動の各因子の中で、体育学級全体を対象として同時になされている活動は、学習者への指示・誘導の活動において単元の各時間にみられる。各グループに対してなされる活動は、指示・誘導の活動において単元の各時間で、学習者の学習活動への補助の活動において単元の前半にみられ、示唆・ほのめかし・発問の活動（引き出す活動）においては、単元の終りにみられる。学習者の各個人へ対してなされる活動は、指示・誘導の活動において単元の各時間でみられ、教授・説明・示範の活動（与える活動）においては、単元の「なかの段階」でみられる。しかし、示唆・ほのめかし・発問の活動（引き出す活動）や学習者の管理活動などについては、一定の規則性はみられない。

つまり、指導者の学習指導過程における単発的活動では、体育学級全体に対しても、各グループに対してでも、また、学習者の各個人に対してでも、学習者への指示・誘導の活動が、単元の各時間においてみられる。「はじめの段階」から「なかの段階」にみられる活動は、各グループに対してなされる学習者への補助の活動である。また、学習者個人に対してなされる活動は、「なかの段階」における教授・説明・示範の活動（与える活動）である。

単元における学習指導過程で指導者の単発的活動が減少傾向を示しているのは、施設用具の管理の活動を指導者個人が行っている場合である。増加傾向を示している活動はみられない。指導者の活動量にそれほどの変化がなく増減傾向の少ないのは、体育学級全体や学習者の各グループや各個人に対しての指示・誘導の活動である。

つまり、指導者の学習指導過程における単発的活動の中心的な活動因子は、指示・誘導の活動であり、補助的な周辺的な活動因子は、教授・説明・示範の活動、示唆・ほのめかし・発問の活動、学習者への学習活動の補助の活動、学習者の管理の活動、施設用具の管理の活動である。

## 2. 学習者の学習過程<sup>(注10)</sup>にみられる活動因子の量的変容

学習過程は、学習者が学習内容を内面化する道すじをさし、具体的には、一連の学習活動としてとらえられている。体育の学習過程は、大別すると、一般的な学習過程と各運動種目の学習過程とに分けて考えることができるが、多くの運動に共通した個々の学習内容が習得されるまでの一般的な学習過程を、ここでは問題とするものである。

つまり、一般的な学習過程は、知覚→思考→練習の過程のくり返しであるので、学習しようとする動きを見たり、説明を聞いたり、実際に動いたりして動き方を知り（知覚）、これをことばによって考えて理解し（思考）、それをくり返して練習することによって内面化されるものである。

そこで、これらの学習過程が、各活動の因子ごとに、継続的活動と単発的活動に分けて、その量的変容の過程を分析・検討し、仮説のような一定の法則性を見出そうとするものである。

### (1) 継続的活動の量的変容

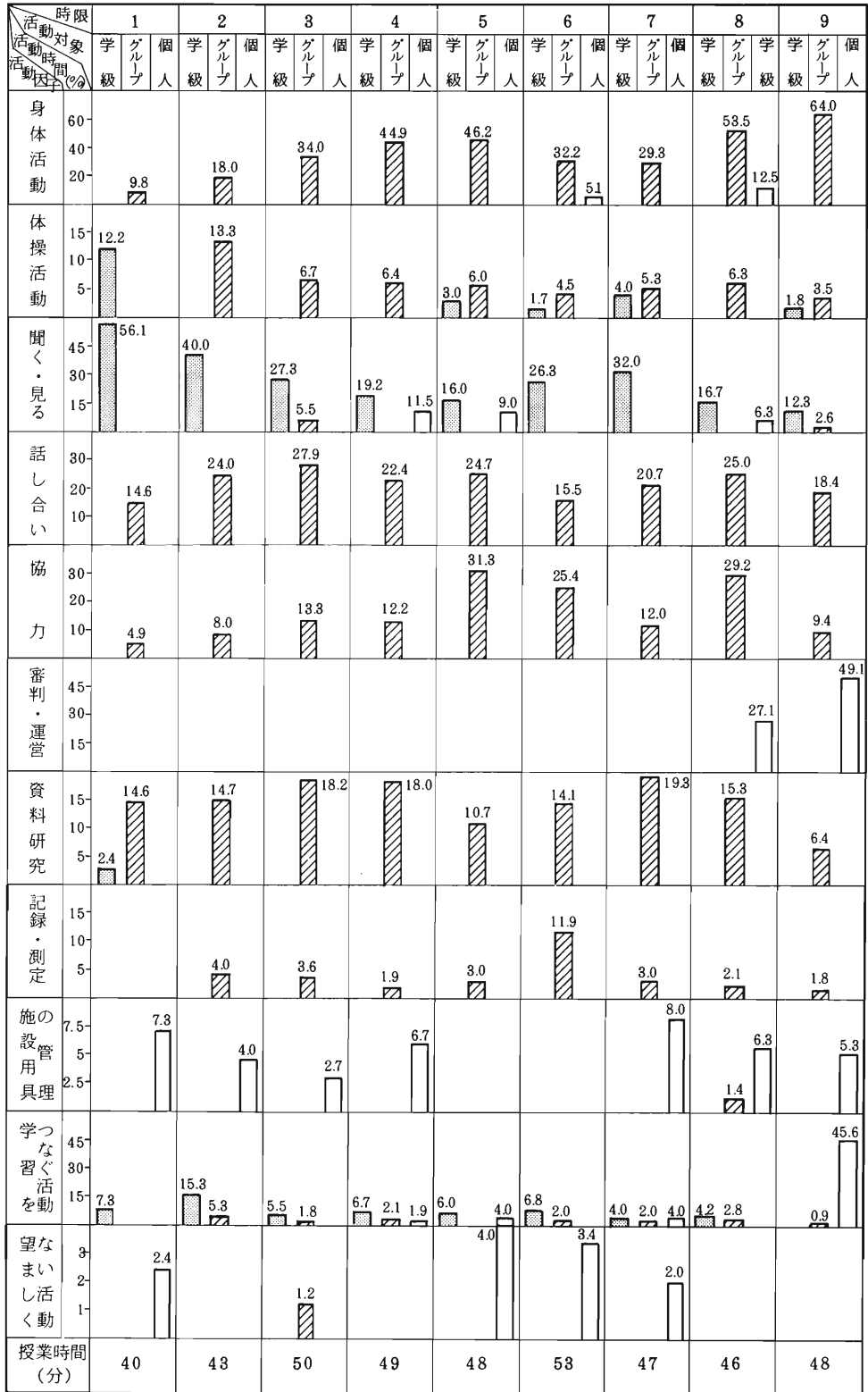
学習者の学習過程にみられる継続的活動の量的変容を示したものが、図4である。

学習者の継続的活動の各因子の中で、体育学級全体で行う活動は、指導者の話を聞いたり見たりする活動と学習をつなぐための待機・移動・集合・整列などの活動で、単元の展開当初から各時間においてみられる。各グループごとで行う活動は、身体活動、体操活動、話し合い活動、協力活動、資料研究活動、記録・測定活動などでほとんど毎時間においてみられる。学習者個人で行う活動は、それほど多くはみられないが、「まとめの段階」におけるゲームの審判や運営の活動であり、「なかの段階」における身体活動、聞いたり・見たりする活動、「はじめの段階」から「なかの段階」における学習者の望ましくない活動で、また、単元のほとんどの各時間における施設用具の管理の活動でみられる。

つまり、学習者の体育学級全体としての活動は、指導者の話を聞いたり・見たりする活動が主であるが、学習者の学習活動の中心は、ほとんどの活動が各グループを単位としており、学習者個人の活動はそれほどみられない。また、学習者の望ましくない活動は、体育学級全体やグループを単位としたものではなく、個人的なレベルで発生している。



図4. 学習者の学習過程にみられる継続的活動の量的変容



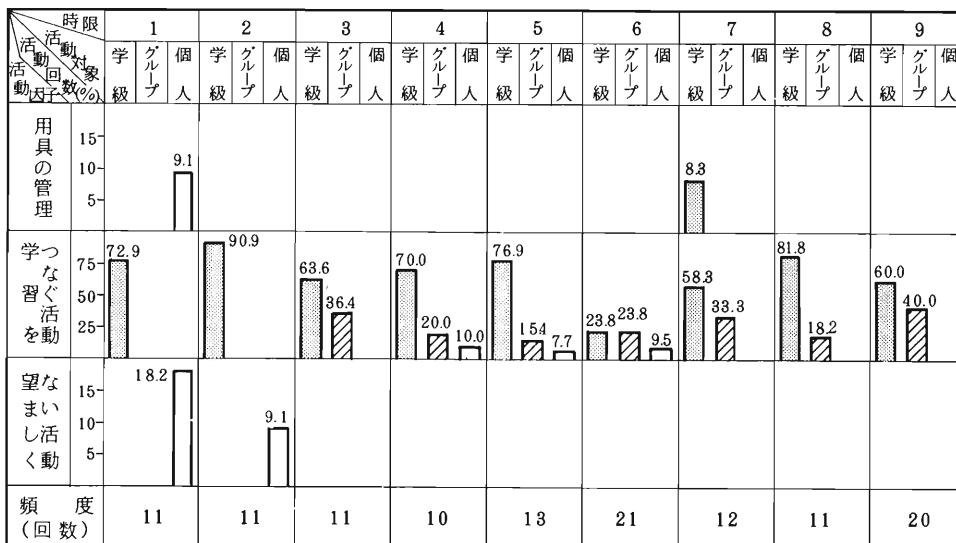
このことから、学習者の学習過程において中心的な活動を占めている因子は、体育学級全体の活動としては指導者の話を聞いたり・見たりする活動で、各グループの活動としては身体活動、話し合いの活動、協力の活動、資料研究の活動などであるといえる。また、補助的・周辺的な学習者の学習過程における活動因子は、各グループを単位とした体操活動や記録測定などの活動とゲームの審判や運営の活動及び施設用具の管理の活動、さらに、学習をつなぐ活動であるといえる。

単元における学習過程で学習者の活動が減少傾向を示しているのは、体育学級全体の活動では、指導者の話を聞いたり・見たりする活動と学習をつなぐ活動である。各グループの活動では、体操活動である。増加傾向を示す活動は、各グループごとの活動での身体活動である。学習者の活動量にそれほどの変化がみられなくて増減傾向の少ないのは、各グループの活動としての話し合いの活動、資料研究の活動、記録・測定などの活動である。また、「なかの段階」に活動量が多くなっている活動は、協力の活動である。さらに、施設用具の管理の活動は、学習者個人のレベルで、つまり、施設用具係として単元の各時間で活動している。望ましくない学習者の活動は、単元の前半から中盤にかけて、ゲームの審判や運営の活動は、単元の終末、つまり、「まとめの段階」で学習者の個人の活動としてみられる。つまり、仮説の傾向を活動因子ごとに見出し検証することができたほかに、「なかの段階」で活動の特徴的傾向を見出すことができた。

(2) 単発的活動の量的変容

学習者の学習過程にみられる単発的活動の量的変容を示したものが、図5である。

図5. 学習者の学習過程にみられる単発的活動の量的変容



学習者の単発的活動の各因子の中で、体育学級全体が同時に行う活動は、学習をつなぐ活動において単元の各時間でみられる。各グループごとで行われる活動は、学習をつなぐ活動において「なかの段階」から「まとめの段階」にかけてみられる。学習者個人が単位となって活動するのは、用具の管理や望ましくない活動において「はじめの段階」でみられ、学習をつなぐ活動では「なかの段階」でみられる。

つまり、学習者の学習過程における単発的活動では、学習をつなぐ活動が中心的である。体育学級全体としての活動では単元の各時間で、各グループを単位とした活動では「なかの段階」から「まとめの段階」にかけて、学習者個人の活動では「なかの段階」でみられる。また、補助的・周辺的な活動因子は、用具の管理活動や望ましくない活動で単元の「はじめの段階」でみられる。

単元における学習過程で学習者の単発的活動が減少傾向を示しているのは、学習者個人の活動としての望ましくない活動である。学習をつなぐ活動は、活動量に変化はみられず単元の各時間ともにおおよそ一定している。

## V 研究のまとめ

この研究は、体育の学習指導過程と学習過程についての基礎的な研究としてすすめてきたものである。つまり、単元を単位としてとらえ、指導者の学習指導に必要な活動因子と学習者の学習に必要な活動因子ごとに、単元の中でのそれぞれの因子の活動量の変容過程から、一般的な授業の流れの法則性を見出そうとしたものである。

その結果についてまとめてみると、次のとおりである。

### 1. 指導者の学習指導過程について：

#### (1) 継続的活動では；

- ① 体育学級全体に対する働きかけは、教授・説明・示範の活動（与える活動）、観察の活動、学習者の管理活動が単元の各時間にわたって行われ、学習者の各グループに対しては、「なかの段階」から「まとめの段階」にかけて、教授・説明・示範の活動（与える活動）、示唆・ほのめかし・発問の活動（引き出す活動）、学習者の学習活動への参加活動、記録・測定の活動が、さらに、学習者個人に対しては、「なかの段階」において教授・説明・示範の活動（与える活動）、示唆・ほのめかし・発問の活動（引き出す活動）、学習者の管理活動が行われている。
- ② 中心的な活動は、教授・説明・示範の活動（与える活動）、学習活動への参加の活動、観察の活動であり、補助的・周辺的な活動は、指示・誘導の活動、学習者の管理の活動などである。
- ③ 単元の進行にともなって活動量の減少傾向を示す活動は、教授・説明・示範の活動（与える活動）、観察の活動、学習者の管理活動であり、増加傾向を示す活動は、学習者の学習活動への参加活動と施設用具の管理活動にみられ、増減傾向がみられず一定している活動は、記録・測定の活動である。また、「なかの段階」にだけみられる活動

は、示唆・ほのめかし・発問の活動(引き出す活動)、学習者の学習活動への補助の活動である。

(2) 単発的活動では；

- ① 体育学級全体や学習者の各グループおよび学習者の各個人に対する働きかけは、ともに学習者への指示・誘導の活動が単元の各時間においてみられる。また、学習者の学習活動への補助の活動は、「はじめの段階」から「なかの段階」にかけて、教授・説明・示範の活動は、「なかの段階」でみられる。
- ② 中心的な活動は、指示・誘導の活動であり、補助的・周辺的な活動は、教授・説明・示範の活動、示唆・ほのめかし・発問の活動、学習者への学習活動の補助の活動、学習者の管理の活動、施設用具の管理の活動である。
- ③ 単元の進行にともなって活動量の減少傾向を示す活動は、施設用具の管理の活動であり、増加傾向を示す活動はみられない。また、増減傾向が少なく一定している活動は、指示・誘導の活動である。

2. 学習者の学習過程について；

(1) 継続的活動では；

- ① 体育学級全体としての活動は、指導者の話を聞いたり・見たりする活動が主であるが、学習者の学習活動の中心は、ほとんどの活動が各グループを単位としており、学習者個人の活動はそれほどみられない。また、学習者の望ましくない活動は、個人的なレベルの活動でみられる。
- ② 中心的な活動は、指導者の話を聞いたり・見たりする活動(受動的活動)、身体活動、話し合いの活動、協力の活動、資料研究の活動であり、補助的・周辺的な活動は、体操活動、記録・測定の活動、ゲームの審判・運営の活動、施設用具の管理活動、学習をつなぐ活動などである。
- ③ 単元の進行にともなって活動量の減少傾向を示す活動は、指導者の話を聞いたり・見たりする活動、学習をつなぐ活動、体操活動であり、増加傾向を示す活動は、身体活動である。増減傾向の少ない活動は、話し合いの活動、資料研究の活動、記録・測定の活動である。また、「なかの段階」で活動量が多い活動は、協力の活動であり、「まよめの段階」でみられる活動は、ゲームの審判・運営の活動である。

(2) 単発的活動では；

- ① 体育学級全体、学習者の各グループ、学習者の個人の活動は、ともに学習をつなぐ活動でみられる。
- ② 中心的な活動は、学習をつなぐ活動であり、補助的・周辺的な活動は、用具の管理活動である。
- ③ 単元の進行にともなって活動量の減少傾向を示す活動は、学習者個人の望ましくない活動であり、学習をつなぐ活動は、単元の各時間でおおよそ一定しており変化はみられない。

以上のことから、設定した本研究の大仮説である、「単元の展開当初は、学習者の学習の見通しが充分ではないので、指導者の与える活動や学習者の受動的な活動が多いが、単元の進行にともなって学習の目標が明確になってくるために、学習者の主体的活動や指導者の引き出す活動が多くなる」を、小仮説1, 2, 3を実証することにより検証することができ、一定の法則性を導き出すことができたといえる。

### 〔引用参考文献〕

- (注1) 竹之下休蔵 授業の進め方 — その構造と過程 月刊体育 第1巻第4号  
光文書院 1970 P 10
- (注2) 牛島義友 他 教育心理学新辞典 金子書房 1969 P 440
- (注3) 宇土正彦 他 体育の学習指導 研究の手びき 光文書院 1965 PP 186~188
- (注4) 竹之下休蔵 他 体育科学学習指導の研究 光文書院 1973 PP 371~372
- (注5) 竹之下休蔵 プレイ・スポーツ・体育論 大修館書店 1972 P 44
- (注6) 竹之下休蔵 他 体育科学学習指導の研究 光文書院 1973 P 12
- (注7) 松田岩男・宇土正彦編 現代学校体育大事典 大修館書店 1973 PP 116~122
- (注8) 宇土正彦 他 体育の学習指導 研究の手びき 光文書院 1965 PP 183~184
- (注9) 松田岩男・宇土正彦編 現代学校体育大事典 大修館書店 1973 P 116
- (注10) 松田岩男・宇土正彦編 現代学校体育大事典 大修館書店 1973 P 115

### — その他の引用参考文献 —

- 1. 宇土正彦 体育における学習指導の形態 保健・体育学講座V 体育学II (日本体育学会編) 体育の科学社 1961 PP 109~136
- 2. 橋本正一 運動技能の発展過程に基づいた体育の学習指導 黎明書房 1966
- 3. 松田岩男 中学校保健体育科の計画と展開 講談社 1959
- 4. 豊田市立畷部小学校 生活のなかに生きる体育活動 — 子どもの主体的活動をとおして — 同校研究紀要第7集 1977